近世中期勧化本と草双紙

――その影響関係について――

山下琢巳

はじめに

明和四年、八文字屋は、版木を大坂の書肆升屋に譲り、浮世草子は終わりをつげる。宝暦・明和・安永期は、これにかわり、草双紙・酒落本・狂歌等の軽文学が主流を占め、やがて、寛政の改革をへて、文学界は後期読本時代へと移行する。また、この宝暦から安永にかけては、その読物としての欠落を補うべく、実録がもっともその形を整えつつ繁栄した時期でもある。

享保七年、幕府の発した出版取締令によって、徳川氏関係の事柄や、世上の噂、実際の事件等を素材とした作品は、すべて公刊を禁止され、その結果、それらはすべて、貸本屋の手を通して写本という形で読者に与えられた。そして、その多くは講釈師の口述を書き留めた講談台本を書写したものである。多くの人は、講釈を聞いて満足し、字が読める者は、専ら歌舞伎・浄瑠璃種の末期浮世草子に飽き足らず、かつての浮世草子が扱った時事性・物語性を写本に読んだのである。

ところで、同じこの時期にあって、仏教長編説話と分類される一群の本がある。(注1) 後小路薫氏などは、この種のものを「近世勧化本」とも総称される。これらは、浄土宗・日蓮宗・真宗などの説教僧が、民衆教化のために、中世以来の本地物・仮名草子・説経浄瑠璃・義太夫正本などをもとに、そこに潤色を加えて説法の種本としたものを、書肆が刊本として出版した作品群であり、同時期の実録と性格を異にする。

中村幸彦氏によって、これらの一群が、中国白話小説とならんで、文化年間、馬琴、京伝らの後期読本発生に大きな影響を及ぼしたことが考証されているが、(注2) それでは、さらに同時代的に草双紙との関連はないのであろうか。本稿では、この点に就いて、深蓮社の僧誓誉著わす所の勧化本『安倍仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』と、それと同じ素材を扱う黒本・青本の比較を中心として考察していきたい。

一、仮名草子から勧化本へ

江戸時代、陰陽家、占術師の間で珍重された書に『篦簋内伝』(『篦簋』『篦簋袖裏伝』『金烏玉兎集』『三国相伝陰陽輦轄篦簋内伝

金烏玉兎集』とも）がある。近世期に出版された多くの暦注案内書は、いずれも本書を参照にしたほどで、したがって、慶長十七年に版行されて以来、十数種もの刊本がある。(注3) この、世に広く流布した『金烏玉兎集』をめぐっての話は、竹田出雲作の浄瑠璃『蘆屋道満大内鑑』（享保十九年竹本座初演）が有名であるが、近世中期に至って、その舞台を天竺・唐・日本の三国にとり、この書の三国相伝の由来を扱った作品が現れる。武州川崎在住の唱導僧の手になる『安倍仲麿入唐記』（宝暦十年序）、『泉州信田白狐伝』（宝暦七年刊）がそれである。

天竺では釈迦が文殊へ相伝し、唐では文殊から伯道上人へ、そして、これを日本へ招来しようと安倍仲麿が入唐したが果たさず、再び吉備真備が入唐して、囲碁・文選・野馬台之詩と難題を克服して持ち帰ったとする。そして、後年、仲麿の子孫である安部晴明が入唐して、伯道より『金烏玉兎集』の伝を授かるというのである。この三国を舞台とし時間的にも広がりを持つ雄大な伝奇物語には、しかし、先蹤作品がある。

『泉州信田白狐伝』の凡例には、「此書ハ老婆勧誘ヲ本トスル故證書ヲ引用セザレドモ多クハ羅山神社考ニ因ル」とあり、また、「世ニ晴明物語ト云草紙ニ有ル分ハ彼書ニユヅリテ此ニ略ス」とも記す。さらに、本文中に「晴明朝臣撰所ノ簠簋ニ」(注4)とあるように、この物語の骨子ともなる話は、林羅山の『本朝神社考』「安倍晴明」の条、浅井了意作とされる仮名草子『安倍晴明物語』（寛文二年刊）、及び『簠簋内伝』由来の章に記されるものなのである。

『簠簋内伝』と、それに注解を施した仮名抄である『簠簋抄』、及び『安倍晴明物語』の関係に就いては、渡辺守邦氏に詳細な論が備わる。(注5) 今、それに、『本朝神社考』を加えて整理すると次のようになる。

『簠簋内伝』には、「天文司郎安部博士吉備後麗清明朝臣入唐伝」として、その由来を載せるものがある。(注6) 安部晴明は、平安朝以来、賀茂家とともに陰陽道を取り仕切ってきた土御門家の祖とされる人物であり、この書が、由緒正しきことを晴明撰として仮託したのである。また、『本朝神社考』「安倍晴明」の条前半部（約二丁分）は、『大鏡』『古今著聞集』『発心集』等より晴明に関する話を引用するが、後半部（約一丁半分）は、その本文に、「陰陽家有二一書一。名曰二金烏玉兎集一。又名二簠簋袖裡伝一。余平日不レ喜二雑書一。一日偶閲二此書一。蕪漫不レ可レ言也。然以二世俗所レ称説一故。聊此記二其略一云」(注7) とあるように、この『簠簋内伝』由来の章に拠って晴明の伝を立てる。ここで述べられるのは、(A)晴明の入唐、伯道より金烏玉兎集の伝授、道満と晴明の妻との密通、金烏玉兎集をめぐっての晴明と道満の賭録、晴明の落命と伯道による蘇生、道満の落命である。

これに対し、解説書である『簠簋抄』由来の章では、さらに、(B)金烏玉兎集の天竺より唐への伝来、(C)金烏玉兎集を求めての安倍仲麿、吉備大臣の入唐、(D)晴明が安部の童子であった頃の話、(E)玉藻前説話が増補され、(B)→(C)→(D)→(E)→(A)という順序となる。『続日本紀』（宝亀六年十月二日）に「従レ使入唐。留学受レ業。研二覧経史一。該二渉衆芸一。我朝学生播二名唐国一者。唯（吉備）大臣及朝衡（仲麿）二人而已」(注8) と記されるように、仲麿、吉備は、日本と大陸の交渉史上、最も重要な人物であったのであり、また、吉備は、わが国の陰陽・遁甲の術の始祖的存在（『新猿楽記』）であった。二者が、この書にかかわったことで、『金烏玉兎集』の価値はさらに高まっ

たのである。そして、この『簠簋抄』由来の章の(E)を除き、時間的整合をはかって読みものとしての物語化を行ったのが『安倍晴明物語』の巻一ノ一より巻三ノ二である。

仮名草子『安倍晴明物語』の作者とされる浅井了意は、また、真宗大谷派の唱導家でもあったが、宝暦期に入り、以上の素材が、説法談義のためのものとして利用され、『安倍仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』という作品を生むことになったのである。

ところで、『簠簋内伝』『簠簋抄』『本朝神社考』『安倍晴明物語』は、ともに、江戸期を通してよく行なわれた書で、『安倍仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』刊行当時も、並列して読まれていたことが考えられる。よって、これらの書と、たかだか十数丁の黒本・青本を比較する場合、漢文、漢字片仮名混じり、仮名書き、和漢混淆文と文体の違いはあるにしろ、物語の大筋だけを追えば、大同小異となって、どれを典拠としたか見極め難いものとなる。しかし、『安倍仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』では、新たな人物、趣向が設けられ、先行書にはなかった人物の心理描写なども書き加えられていく。これらの点を拠り所として、次に『安倍仲麿入唐記』と同材を扱う青本に就いて、その影響関係を探って行きたい。

二、青本『吉備大臣』と『安倍仲麿入唐記』

安倍仲麿、吉備大臣の入唐説話を扱う青本に、東北大学狩野文庫蔵『(吉備大臣)』がある。題簽は後のもので「吉備大臣」までが判続できるが以下摩耗で、正確な外題を知り得ない。柱刻には「中」とあって、これは、安倍仲麿の「仲」を表わすものと考えられる。刊年についても未詳であるが、一丁表・六丁表・十一丁表それぞれの匡郭上に記される屋標より、鱗形屋が版元であることが知れる。また、画者については、十五丁裏に、「全部三巻鳥居清倍筆」とある。本書に該当すると思われる書名は、『日本小説書目年表』にも見あたらず、原題名、刊年、ともに明確でないが、その梗概を示すと次のようになる。

安倍仲麿は、勅諚によって、めのと荒木八郎高重とともに唐へ渡る。玄宗皇帝は、日本からの貢物が少ないのを不満に思い、臣万戸・千戸に仲麿を日本へ帰さないよう申しつける。千戸は、虎に、仲麿を喰わせようとするが失敗し、仲麿・荒木をげきよう山に追いつめ矢を射かける。矢に当った仲麿は、淡海の海岸に辿り着き、「あまのはらふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも」と辞世の歌を詠み、書置と太刀を、息子の月満丸に渡すよう荒木に言い残して死ぬ。荒木は唐に残って敵を討つ決心をする。この時、住吉明神が鳳凰となって現われ、書置と太刀をくわえて日本へ飛び去る(五丁裏)。朝廷は、仲麿が日本へ帰らないので、再び吉備大臣を遣唐使として派遣する。書置を見た月満丸は、吉備の小姓となってともに唐へ渡る(十丁裏)。万戸は、吉備に、野馬台之詩が読めない時は殺すともちかけるが、長谷観音の功力で難を脱する。この時、物影より月満丸が飛び出し万戸を討つ。吉備と月満丸は、荒木と出合い、三人は日本の神々の加護によってめでたく帰朝する(十五丁裏)。

仲麿、吉備の入唐目的が、金烏玉兎集を得るためと記されず、趣向に於いても異なる部分があるが、大筋の流れは、『安倍晴明物語』巻一ノ三〜巻二ノ二、『安倍仲麿入唐記』と類似する。もっとも、

金烏玉兎集が関与せず、入唐した吉備に、囲碁、文選、野馬台之詩と次々に難題がもちこまれ、これを赤鬼となった仲麿が助けるという説話は、古く、『江談抄』第三に見え、この系統を引く『吉備大臣物語』（大東急記念文庫蔵）、『吉備大臣入唐絵詞』にも見える。(注9)また、江戸期に入ると、『歌行詩諺解』（貞享元年刊）、『長恨歌詳解』（貞享二年刊）などの刊本に、長恨歌、長恨歌伝、琵琶行とともに野馬台之起として、この説話が附されるようになる。(注10)つまり、『簠簋抄』『安倍晴明物語』とは別のルートでも、この説話が流布していくのである。よって、青本『吉備大臣』の典拠を探る場合、これらの書をも考慮に入れる必要がある。

さて、以上の書を比較すると、大筋では類似するものの細かい点に於いて出入が見られ、青本『吉備大臣』と完全に一致するものはない。しかし、青本『吉備大臣』と『安倍仲麿入唐記』の間には、両書にしか見られない趣向がある。両書には、ともに仲麿の妻子が登場し、これらの人物が、物語に絡んで、筋の展開の上で一つの山場を創り上げるのである。そして、仲麿の子の名を、青本『吉備大臣』は、「月みつ丸」とし、『安倍仲麿入唐記』は、「満月丸」とする。

『安倍仲麿入唐記』では、仲麿渡唐の間、仲麿の兄好根が、家を押領せんと仲麿の妻に言い寄り、叶わぬときは満月丸を殺すと迫るが、仲麿の妻は、夫への貞操を守って自ら命を断つという趣向を設ける。この夫を唐土へ送ったために起きた悲劇は、青本『吉備大臣』には記されないが、異郷で夫を失った親子の悲しみを次のように記す。

なか丸のみだい、つまのふみをみてなげき大かたならず。あまりこひしさに、はんどんかうをたきたまへば、かうのけむりにうつりて、まぼろしのごとくなか丸のすがたあらわれ、さいごのものがたりし給ふ。きみにわかれて此身はなんとなりませうぞいの。あさましのうきよやのう。かゝ様、ちゝうへは、もろこしにて御はてなされましたか。これはまあかなしい事でござんす。（六丁裏・七丁表）

また、凌雲閣の楼上に閉じ込められた仲麿が、唐土から故郷の妻子を思って辞世の歌を詠む場面の心理描写を、『安倍仲麿入唐記』は次のようにする。(注11)

今日命終ト思ワレケレバ、サスガ古郷ノナツカシク、某斯トハ知リ玉ワデ、我ガ君ノ待チ玉ワン御ナツカシヤシタワシヤ。春日野ノ妻ヤ子ノサゾヤ待ラン不便ヤト、君命トハ云ナガラ我生国ノ秋津洲ヲ離レ外土ノ塵トナリ果ツルハ、抑ヤ因果カ天命カ（中略）血ノ泪ト共ニ残コセル一首ニモ我子ヲ亡レ兼ナガラ満月丸ノ名ニョソヱ、古郷春日野、三笠山ニ、夫婦詠シ満月モ今ニ見ル月モ更ラネド更リ果タル身ノ上ト、カコツ泪ト諸共ニ一首ノ哥ゾアワレナル。（巻二）

『百人一首』にも載るこの有名な歌は、『古今集』の左注に拠れば、唐土で長年をおくった仲麿が、日本からの使節とともに帰朝する折、明州の海岸で詠んだものとされている。これを楼上に幽閉された時の歌としたのが『江談抄』から『安倍晴明物語』に至る物語類であるが、これらはすべて妻子を思っての歌とはしない。

『古今集』では、送別の宴での歌とされ、「たけたかく余情かぎりなし」（『応永抄』）とも評されたこの歌が、中世物語、仮名草子では、楼上での切なる望郷の思いを込めた歌となり、『安倍仲麿入唐

記』に至って、妻子への思いを詠んだ歌へと変貌する。この一首をめぐって一種の愁嘆場が形成されるのであるが、これは、青本『吉備大臣』の場合も同様である。

青本『吉備大臣』は、この歌を、「もろこしにてあべの仲丸じせいの哥」とし、仲丸は荒木に「いのちながらゑて、月みつ丸をもりたて、わがかたきをうってくれよ」と遺言する。場所が淡海の海岸となっているのが、『安倍仲麿入唐記』の楼上と相違するが、絵で、荒木が目頭を押えており、異国で、子を思いつつ無念の死を遂げる場面となっている。

もっとも、この二書に共通する場面は、多分に演劇的であり、先行の歌舞伎・浄瑠璃からの趣向である可能性もある。事実、『歌舞伎細見』(注12)には、「此の伝説（『吉備公入唐草子』所載）を仕組んだものに古くは宇治加賀掾語物の古浄瑠璃に『吉備大臣』あり」と記され、『歌舞伎年表』(注13)に拠れば、元禄十年十一月江戸中村座で『阿部の仲丸』、元文三年四月大坂あやめ座で『阿部仲麿養老瀧』がそれぞれ上演されている。また、『世界綱目』(注14)には、「土佐ぶし安部仲麿又養老ともいふ」として、土佐正本があったことを記す。

これらはすべて、正本・台帳ともに伝わらず、その詳しい内容については不明である。しかし、土佐正本『安部仲麿』が、一名『養老』と言うこと、また、歌舞伎に『阿部仲麿養老瀧』があることが注意される。

仲麿が入唐したのは養老元年、『十訓抄』六、『古今著聞集』巻八に拠れば、この年、薪を売って老父を養う孝子が、その徳によって美濃の山中で酒の泉を発見したという。年号を共通点として、仲麿説話と孝子譚が結びつけられていたと考えられるが、この養老瀧伝説は、実は、『安倍仲麿入唐記』にも取り入れられているのである。このことは、江戸中期にも、仲麿入唐説話を扱った歌舞伎・浄瑠璃が上演されていた可能性を考えさせる。

また、青本『吉備大臣』では、荒木の剛勇ぶりを「さて〳〵ちからのつよいやつかな。ゑにかいたゑびぞうとやらがよふだ」（四丁表）、「日本のゑびぞうとやらよりつよいぼうづめだ」（十四丁裏）とし、絵に見えを切る荒木を描き、あたかも舞台で海老蔵（二世市川団十郎）が荒木を演じたかのように記す。(注15)

さらに、『安倍仲麿入唐記』では、玄宗皇帝の悪臣を、安禄山、楊国忠とするが、青本『吉備大臣』では、万戸、千戸とする。これは、はやく、幸若『大織冠』(注16)に「千人が大将を千戸と言ひ、万人が大将を万戸と名づく」と見え、同様の詞章が、近松の『大職冠』（正徳元年十月頃大坂竹本座上演）、その改作物である『万戸将軍唐日記』（延享四年三月大坂豊竹座初演）、また、歌舞伎に於いては『面向不背玉』（元禄十年初演カ）にも載る。そして、近松の『大職冠』、『万戸将軍唐日記』では、海士の名を「満月」とする。これらの作品は、玉取り説話を骨子とするもので、その扱う世界も、青本『吉備大臣』と同じでないが、登場人物の名に於いて一致するものがある。

仲麿辞世歌の場面が愁嘆場を思わせるなど『安倍仲麿入唐記』、青本『吉備大臣』ともに演劇色が濃い。あるいは、同材を扱った歌舞伎・浄瑠璃があり、それが同時代的に二つの作品に反映したとも考えられる。また、冒頭に記したように青本『吉備大臣』の刊年は不明で、『安倍仲麿入唐記』との前後関係も明らかにしえない。しかし、同材を扱った後年の歌舞伎で、その内容が明らかな瀬川如皐作

『金烏玉兎倭入船』（嘉永五年正月江戸中村座上演）、河竹黙阿弥作『吉備大臣支那譚』（明治八年五月河原崎座上演）などには、この場面は見られない。

『安倍仲麿入唐記』に先立つ浄瑠璃『菅原伝授手習鑑』（延享三年八月大坂竹本座初演、翌年江戸肥前座で上演され大当りをとる）四段目は、松王が、わが子小太郎を菅秀才の身替りに死なせた悲しみを述べる寺小屋の場面で有名である。また、このわが子を身替りにして首実検に供えるという趣向は、『一谷嫩軍記』（宝暦元年十二月大坂豊竹座初演）にも見え、愁嘆場としての見せ場となっている。演劇界に於いては、この時期、このような親子死別の趣向が好んで用いられていた。

しかし、人物の心理を細かく描いて人々の心を捉えたのが勧化本の特色の一つで、読本作者もこれに習うところがあった。また、勧化本は、唱導のための種本としての目的もあって、人々の泪を誘う場面も必要である。『安倍仲麿入唐記』では、吉備が囲碁を打つ場面でも、相手の玄東に隆昌女という妻があったとし、夫の勝ちを願うあまり黒石を一つ盗む折の心理描写を行っている。仲麿とその妻子の死別の場面は、演劇的であり、その方面からの影響も考えられる。しかし、それはまた、当時の好尚を反映したものであり、『安倍仲麿入唐記』に於いて創作されたとも考えられるのである。そして、黒本・青本作者が、これも子女を対象とすることから、それを取り入れたのではないだろうか。

三、青本『阿部晴明一代記』と『泉州信田白狐伝』

金烏玉兎集を求めて、安倍仲麿、吉備大臣が入唐するのが『安倍仲麿入唐記』であったが、『泉州信田白狐伝』は、仲麿の後身である安部の童子が成長して晴明となり、入唐して伯道より玉兎集の伝を授かることをその骨子とする。そして、これと大筋に於いて重なる部分を持つのが、国立国会図書館蔵『阿部晴明一代記』である。本書を『国書総目録』は黄表紙に分類し、その刊年を寛政四年とするが、一・六・十六・二十一丁表それぞれに鱗形屋の屋標があり、後に、蔦屋が版木を譲り受け、青本を改装再版したものである。本書には序文が載り、作者自らがその創作意識を述べているので次にそれを引用する。

信太妻といへる草紙を見れば白狐化して阿部の保名がつまとなりて童子といふ子を産。いとけなきより才知人にこへたり。これを晴明といふ。しかるに母のくずの葉が化のあらはれしをはぢらへすみかへ帰りしことのみにて易道の事はなし。せいめい入唐して文珠袖裏井の天理をまなび暦算推歩の術にいたりしゆへ道満法師とあらそふ事ありといふはなしにたよりて宇治拾遺物語、東斎随筆、又は十訓集、或は羅山子の撰る晴明伝等に述る所のあらましを今様にとりあはせ狂言綺語にあやなして児女の翫になして春興の美笑を催す事になりぬ。

序文に拠れば、本書は、晴明物語のうちで信太妻として伝えられる部分は除き、晴明が入唐してから以後の話を扱うと言う。ここでいう信太妻とは、古浄瑠璃正本『しのだづま』（延宝二年刊）を指すと考えられるが、この正本が扱うのは、先の一章で述べた(D)の部分で、仮名草子『安倍晴明物語』の巻二ノ三から巻二ノ七にあたる。そして、本書がその大筋とするのは(A)の部分で、『安倍晴明物語』巻二ノ八、巻三ノ一・二にあたる。また、この部分は、『本朝神社

考』の晴明伝とも重複する。序文に言う「羅山子の撰る晴明伝」とは、この『神社考』のことなのである。よって、本書は、『神社考』を典拠とすると考えられる。

しかし、細い点について見ると、青本『阿部晴明一代記』では、入唐した晴明が修行成って帰朝の時、伯道が

なんぢ此うへは三つのいましめあり。酒をのむ事なかれ。をんなに心ゆるす事なかれ。しいてものゝかけをする事なかれ。

と三つの戒めを与えるが、この戒めが『神社考』には記されない。今、同話を扱う『簠簋抄』『安倍晴明物語』『泉州信田白狐伝』について見てみると、次のように、それぞれに記載がある。

其ノ後清明帰朝セントスル時、清明ニ伯道ヨリ三ノ制メヲ蒙ムル。一ニハ七ノ子之妻ニ意許ス可カラズ。二ニハ大酒ノ事、三ニハ行論、此ノ三ノ制ヲ請ケ帰朝スル也。(注17)

『簠簋抄』

日本に帰朝すべしとて、重ねて、三つのいましめをのべらる。一には七の子はなすとも、妻に心をゆるすべからず。二には大酒をすべからず。三には片落の論をすべからず。汝一生のうち、此三をかたくつゝしまば行末めでたかるべし。(注18)

『安倍晴明物語』

帰朝ノイトマヲタマフ此トキ三禁アリ。一ニハ大酒ヲ禁ジタマフ。二ニハ女犯ヲ禁ジタマフ。三ニハ片落ノ論ヲ禁ジ玉フ。若コノ三ツノ内一ツモオカサバ災ソノ月ヲ出ズ。三ツ犯サバ災其日ヲ出ズ。

『泉州信田白狐伝』

本箇所の比較に於いては、三つの戒めの順序という点で、『泉州信田白狐伝』の記述が青本に近い。しかし、表現の類似という点で難がある。青本『阿部晴明一代記』は、これ以外の書に拠った如くであるが、実は、これと同じ説話を載せるものがある。これもよく行なわれた『広益俗説弁』(正・後・遺編享保二年刊)に載る「阿倍晴明道満に殺され蘇生して道満をうつ説」というのがそれである。(注19)次に、三つの戒めを記した部分をあげる。

伯道、晴明をいましむるに、酒を飲むことなかれ、女に心ゆるすことなかれ、しひて賭することなかれといふ三事を以てす。

戒めの順序、表現ともに、青本とよく類似する。さらに、この三つの戒めをことごとく破ったために死んだ晴明を蘇生させた伯道が道満のもとへ行き問答する場面を、三書によって比較すると次のようになり、『広益俗説弁』の記述が青本により近いことがわかるのである。

於是道到二道満宅一問曰。晴明在否。満答曰。古有二其人一。今成二墳家一。伯道曰。我知二其人在二竹林中一。汝可二尋来一。

『本朝神社考』

ともなひて道満が宅にいたり、伯道まづ入りて、此家に晴明ありやと問ふ。道満こたへて、いにしへそのひとあり。いまは墳家となれりと言ふ。伯道いはく、われそのひとの竹林にあるを見たり。汝急ぎ尋ねきたるべし。

『広益俗説弁』

それよりせいめいをともなひ、どうまんがいゑにゆき、はくどうまづたづぬるは、此いゑにせいめいありやといふ。どうまんこたへて、その人は今は此世になしといふ。はくどうの給ふ

は、竹林のうちにてわれせいめいを見たり。なんぢつれきたれといふ。

青本『阿部晴明一代記』

青本『阿部晴明一代記』では、晴明物語を軸に据え、そこに、元良親王及び志賀寺の上人と京極の御息所の話、顕光が道長を恨み悪霊となった話、醍醐帝の堕獄譚が組み入れられる。これらの話は、序文にその書名があがる『十訓抄』『東斎随筆』、又は、黒本・青本作者がよく素材とする『太平記』に載り、文辞の比較より、それらの書に直接拠ったことは明らかである。しかし、これらは、また、すべて『広益俗説弁』にも記されるのである。さらに、『広益俗説弁』の晴明に関する俗説を記した条の評では、「羅山子の撰べる晴明伝にも」、「故事談、宇治拾遺物語、東斎随筆等」と書名を掲げて、その妄説なることを難じるが、これが本書序文の引用書を想起させる。

後述するように、確かに、本書は『本朝神社考』をその典拠としていたと考えられる。しかし、本書の作者は、また、序文に掲げない『広益俗説弁』をもその典拠としていたのである。そして、このことは、さらに、序文に明示しないものをも典拠とすることを示しているといえよう。

ところで、この組み入れられた説話のうち醍醐帝の堕獄譚は、早く『扶桑略記』第二十五所引「道賢上人冥途記」に記され、『宝物集』巻二、『沙石集』巻八、『真言伝』、『太平記』巻二十六・三十五などの諸書にも伝え、また、『北野天神縁起』の諸本の中にも、この話を扱うものがある。

青本『阿部晴明一代記』の場合、日蔵六道廻りは、本文の類似より『十訓抄』第五に拠ること明らかである。しかし、この日蔵の話が語られる二十一丁表から、文子の託宣が描かれる二十四丁表までの展開が、先にあげた書のうちの『天神縁起』と類似するのである。もっとも、この展開の類似は、典拠としてあげる『本朝神社考』「北野」の条に拠ったためと考えられる。しかし、次に示すように、『神社考』と青本では、北野社創建に関する文子の託宣の内容に相違がある。

天慶三年七月十六日。託二右京七條坊婢文子一。欲レ接二右近馬場一。

『本朝神社考』

てんけい三ねんのころ、かんせうじやうあやことといふ小児にたくしてのたまわく、ていしん公は、しへいの弟なれど、わがさせんをふかくなげき、いんぎんのむすびありしゆへ、なをゆくすへまもらんとの給ひ、また、きたのうこんのばゝにすまんとしんちよくをくちばしりけり。

青本『阿部晴明一代記』

道真の霊が、貞信公とその子孫を守護したことは、はやく『北野天神御託宣記文』（恩頼堂文庫蔵）所収の「正暦元年十二月四日御託宣記」に記されるが、『天神縁起』としてもっとも古い書写年代を有する『天神記』（建久本）では、天徳三年、貞信公の子九条師輔が、北野の社壇を造営したこととあわせ記され、その内容は次のようである。（注20）

菅丞相の鎮西へくだり給ける時、貞信公は本院の大臣の御おとゝにて右大臣にてまし〳〵き。さらに子の上の謀計にともなはず、菅丞相と心を一にて、たがひに消息をかよはして、へだ

つこゝろましまさず。このゆゑに貞信公とはねんごろに契をむすびて、ことに御一家をまもりさいはへ給へば、家門に摂政たえずして、天下をば心にまかせ給たれ。

この記述は、建久本系統の写本・絵巻に継承されていく。よって、青本の作者が、このうちの一本を見たとも考えられるのであるが、これら『天神縁起』(注21)による天神信仰の流布は、中世から近世初期にかけてであるという。そのためか、慶安元年の刊本『天神本地』(明治期に入るまで、諸所の書肆から印行された)には、既に、この記述は見られない。

しかし、近世期に入ると、この『天神縁起』に替わって、天神信仰の神道講釈が、その種本または読み物として書写伝来した『菅家瑞応録』という書が流布していく。中村幸彦氏によると、この書は、近松の『天神記』(正徳四年正月大坂竹本座初演)に一部流用され、先にあげた『菅原伝授手習鑑』の材料となり、さらに、講釈師吉田天山の『北野実伝記』(安永八年序)の素材ともなったという。(注22)浄瑠璃作者、講釈師に素材を提供したこの書は、また、青本作者の目にとまったかもしれない。今、この書の一写本である菅家文庫蔵本(注23)について、貞信公の記述をみると、上巻「時平菅公ノ門弟子ヲ放遂セント企ル事」の本文の評として次のようにある。

慈鎮愚管抄ニ云ク、時平コソ角ク心モ悪ケレ、貞信公ハ弟ニテ有ケレドモ、菅公ノ筑紫ヘヲワシマシケルニモ、内々ニ御音信ヲ申サレケル。

『菅家瑞応録』の全写本にあたらないと何ともいえないが、ある写本には、貞信公のことが、評としてではあるが記されていたと考えられる。

『当世門はず語り』(明和元年刊)巻五に「町道場の夜談義で中将姫ぎやうでう記、あるひはかんせうじやうの御ゑんぎなどと高座へ上り」と記されるように、当時、『菅家瑞応録』は、勧化本『中将姫行状記』(享保十五年刊)などとともに講釈としてもなされていた。(注24)あるいは、貞信公のことも、講釈の折には色をつけて話されており、それを青本作者が耳にとめたとも考えられる。

しかし、以上にあげた『天神縁起』『菅家瑞応録』では、首尾一貫して道真に関することのみが述べられる。それに対し、本書の場合、晴明の物語が述べられてきて、二十一丁以下に至って突如道真に関する話となる。

ここで、『泉州信田白狐伝』についてみると、安部の童子が禁廷の異常を占うのをとりなすのが貞信公であり、延喜帝堕獄譚はないが、天長八年の雷災、天徳四年の大内炎上、応和元年の後凉殿震動と村上天皇の御悩を、当君が醍醐帝の十四子であるために菅丞相の霊が祟をなしたものと晴明が見抜き、貞信公の奏聞によって、その霊に太政大臣一位を与え、北野に社を設けて西方大威徳天満大自在天神として祭ったとして、その評に次のように言う。

時ノ関白忠平公ハ正シキ藤原ノ時平公ノ弟君ニテ共ニ相国頼実公ノ御子ナリ。然レドモ時平ハ菅承相ヲ讒シタマヒテ悪名ヲ末代ニ流シ、忠平公ハ兄君ノアヤマリヲ知テ菅承相ニ贈官ヲ奏シテ終ニソノ身モ太政大臣摂政関白ヲ兼タマヒ後ニ貞信公ト号ス。

安部晴明が、貞信公に仕え菅公の霊を鎮める役を担ったとするのは、勿論、史実に相違するが、これを作り物語として読むとき、そこに破綻はなく、晴明物語の中に天神説話がうまく取り込まれてい

る。それに対し、青本『阿部晴明一代記』の場合、貞信公は、五丁表に物語の展開と何ら関係なく登場し、また、二十一丁以下が、これも突如、天神説話となって、文子の託宣の中で、貞信公のことが語られる。晴明物語と天神説話のつながり、そこに於ける貞信公の役割が明確でないのである。この物語の均衡を破ってまでして、天神説話を組み入れた理由は、何なのであろうか。そこには、やはり『泉州信田白狐伝』の影響が考えられるのである。

文政二年、上方で出版された読本『絵本輪廻物語』(東麓畠山保躬画)は、『安倍仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』の二書を一つとし挿絵を加えた作品である。馬琴の稗史ものを中心として江戸前の読本が隆盛の極みに達しようとしていたこの時期に、上方で勧化本を素材とする作品が生まれたことは、確かに、上方出版界の弱体ぶりを示しているといえる。(注25)しかし、このことは、『安倍仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』の二書が、なお、人気作であったことをも考えさせる。また、『連夜説教阿部保名』(明治三十年其中堂書店刊)は、後年のもので、十夜にわたる連続口演の形式をとる作品であるが、「演義体の物とては安部仲麿入唐記、泉州信田白狐伝、安部晴明伝、絵本輪廻物語」として、二書の名をあげている。(注26)

このように後続の作品に影響を与えた二作品は、その刊行当時も広く享受されたことと思われる。『吉備大臣』『阿部晴明一代記』ともに鱗形屋をその版元とする。勧化本の性格上、作者自身が説教の席で耳から仕入れた可能性もあるが、あるいは、『安倍仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』の好評を察した版元が、作者にそれを提供したことも考えられる。いずれにしろ、時流の人気作をすばやくとりいれたのが、『吉備大臣』『阿部晴明一代記』であったのではないか。

結　語

本稿に於いては、勧化本のうち『安倍仲麿入唐記』『泉州信田白狐伝』の二作品の影響が見られる黒本・青本のみについて考察を行ってきた。この同じ作者による『勧化五衰殿』『勧化五衰殿附録』(宝暦七年刊)が、黒本『五衰殿熊野本地』(鳥居清満画・宝暦十一年鱗形屋刊)に影響を与えた可能性については別稿に於いてかつて述べた。(注27)また、黒本『殺生石水晶物語』(画者未詳・明和七年鱗形屋刊)は、玉藻前説話を扱った作品であるが、その中に「白狐通に曰く」という詞章が見え、これなども同じ素材を扱う『勧化白狐通』(単潮作・明和三年刊)が反映したものと受けとれよう。さらに、黒本『七小まち』(画者・刊年未詳・鱗形屋刊)は、『西鶴織留』を典拠とするが、その終丁には、講釈師と「身上七小町かうしやく」という看板が描かれ、ここにも、講釈として行なわれていた勧化本『小野小町行状記』(大江文坡作・明和四年刊)の影響が認められる。(注28)

このように見てくると、他に勧化本として分類される『苅萱道心行状記』『隅田河鏡池伝』『文覚上人行略鈔』『弥陀次郎発心伝』『三奘太夫盛衰録』などについても、それと同じ話柄を扱う黒本・青本との関連が考えられるのである。

馬琴が、その著『石言遺響』で、勧化本『小夜中山霊鐘記』(寛延元年刊)を、一篇の骨子としたのが文化二年、また、同じ年、山東京伝は、勧化本『勧善桜姫伝』(明和二年刊)に拠って、『桜姫全

伝曙草紙』を創作した。読本作者が、勧化本に、和漢雅俗混淆文としての文体、長篇小説としての構成、史書古典からの取材方法、一篇を流れる因果応報観を学んだのに対し、黒本・青本の場合は、趣向への興味という表面的な摂取にとどまる。しかし、このような創作態度は、また、同時期の勧化本をすばやく取り入れることを可能にしたともいえよう。

注（1）「近世勧化本刊行略年表」（『文芸論叢』昭和53年3月）
（2）「読本発生に関する諸問題」（『中村幸彦著述集』第五巻昭和57年中央公論社刊）
（3）中村璋八氏「篁蟇内伝について」（『日本陰陽道書の研究』昭和61年汲古書院刊）
（4）本文は、都立中央図書館加賀文庫本に拠る。以下同じ。
（5）「清明伝承の展開」「清明伝承の成立」（『仮名草子の基底』昭和61年勉誠社刊）
（6）注3に同じ。
（7）本文は、『続日本古典全集』影印本に拠る。以下同じ。
（8）本文は、『新訂増補国史大系』に拠る。
（9）小松茂美氏「『吉備大臣入唐絵巻』考証」（日本絵巻大成3昭和52年中央公論社刊）参照。
（10）近藤春雄氏『長恨歌・琵琶行の研究』（昭和56年明治書院刊）参照。
（11）本文は、国立国会図書館本に拠る。
（12）飯塚友一郎氏、大正15年第一書房刊。
（13）伊原敏郎氏、昭和31・32年岩波書店刊。
（14）国立劇場芸能調査室編『狂言作者資料集(一)』昭和49年刊。
（15）丹和浩氏によれば、二世団十郎がこのように投映された黒本に『東荘寺合戦』（鳥居清満画、刊年未詳、丸屋刊）がある。（『江戸の絵本Ⅱ』昭和62年国書刊行会刊）参照。
（16）本文は、平凡社東洋文庫『幸若舞1』に拠る。
（17）本文は、伝承文学資料集第十二輯『室町期物語二』所収の寛永六年版本翻刻に拠る。
（18）本文は、『仮名草子集成』第一巻に拠る。
（19）本文は、筑波大学本に拠る。以下同じ。
（20）本文は、『神道大系』神社編十一北野に拠る。
（21）注20解題参照。
（22）「菅家瑞応録について」（『中村幸彦著述集』第十巻昭和58年中央公論社刊）参照。
（23）本文は注20に同じ。
（24）中村幸彦氏「文運東漸」（『中村幸彦著述集』第四巻昭和62年中央公論社刊）参照。
（25）横山邦治氏『読本の研究』（昭和49年風間書房刊）参照。
（26）この書については、関山和夫氏「仏教小説『連夜説教』の話芸性」（『話芸研究』昭和56年9月）に紹介されている。
（27）拙稿「『五衰殿熊野本地』について」（『昭和62年度科学研究費による赤本・黒本・青本の研究』昭和63年3月）
（28）有働裕氏「『七小まち』について」（注27に同じ）参照。

本稿を成すにあたって資料の閲覧、複写をお許し下さった諸機関に対し、心より御礼申し上げます。

（筑波大学博士課程文芸・言語研究科日本文学）